

京 上京探訪

～語り部と歩く1200年～



聚楽第、伝承の地を歩き学びそして楽しむ ～堀跡の大高低差、名水の井戸、町名、伝承…今、幻の城が甦る～

天下統一を目前に控えた豊臣秀吉が、本拠として築いた政庁兼邸宅、それが聚楽第です。西陣の南に位置し、深い堀と石垣に囲まれ、内外はことごとく金色に輝く豪華絢爛な城郭でしたが、わずか8年で破却。短命ゆえ、その正確な位置すら、長く不明でした。堀跡の大高低差、名水の井戸、町名、伝承…、幻の城・聚楽第を訪ねます。

- 赤字 = 聚楽第に因む町名・通名
- 青字 = 堀に因む町名・通名
- 紫字 = 大名屋敷に因む町名
- 緑字 = 聚楽町に因む町名

① 一条戻橋

洛中と洛外、この世とあの世を分ける橋として、平安時代から現代に続くまで、様々な伝承を生んでいます。その橋名ゆえ、「戻橋」の場所は時代により移転させられてきました。

② 堀川第一橋(旧戻橋・聚楽大橋・中立売橋)

聚楽第造営当時は、こちらが戻橋と呼ばれていたようです。天正16年(1588)、後陽成天皇の豪華絢爛な行列は、この橋を渡って聚楽第に行幸しました。政権が江戸幕府に移った後も、幕府が直接管理する公儀橋として重要視され、寛永初期(1624～27)に描かれた「京都図屏風」には、堀川に架かる橋のうち他は板橋なのに対し、当橋と下立売橋(公儀橋、後の堀川第二橋)のみ欄干と擬宝珠が描かれています。現在の石造りのアーチ橋は、明治6年(1873)架橋。堀川第一橋と称され、豊臣期以来の重要性を受け継いでいます。

③ 中立売通(御幸道通・旧正親町通)

聚楽第と禁裏御所を結ぶ幹線道路で、大名屋敷が立ち並んでいました。聚楽第行幸では「六千余人」の武士が辻々を警固しており、行列の先頭が聚楽第に達したとき後尾はまだ内裏にあったといいます。平安京の頃は正親町小路と呼ばれており、正親小学校の校名の由来となっていますが、本来は聚楽小学校と命名すべきだったとの地元の古老の言い伝えがあります。

④ 本丸東濠跡(金箔瓦出土地)

平成4年(1992)の発掘調査で、幅26m深さ8.6mの巨大な堀跡が見つかりました。また堀の埋土の中から、金箔が付着した瓦が約600点出土し、重要文化財に指定されました。金箔瓦は、聚楽第殿舎の屋根をきらびやかに飾っていたものと思われます。旧大宮通(明治中期までの大宮通)が一条通から下長者町通にかけて東にずれているのは、この東堀の影響かと思われます。

⑤ 梅雨の井

かつて聚楽第内にあり、太閤秀吉が茶の湯に使う水を汲ませたという伝承が残る井戸跡です。近世から近代にかけて、近隣の共同井戸として使われてきましたが、昭和25年(1950)に突然崩壊。その後、現在残骸が残る鉄製の手押しポンプが設置されました。この付近は季節による水位変動が大きく、かつては梅雨の季節になると湧水が自噴していましたが、高度経済成長期以後、路面の舗装が進み、雨の土中への浸透率が低下、急激に水位が低下・枯渇し、昭和後期には梅雨時の湧水は出なくなったといわれています。歴史を背負いながらも生活者が息づく、路地の中にあります。

⑥ 外郭西濠の落ち込み

著しい高低差があり、聚楽第外堀の痕跡と考えられています。土屋町通は平行する千本通より全体的に標高が低く、明治30年頃まで土屋町下立売付近では堀跡が水を湛えており、夏場には子供たちが泳いでいたといわれています。

⑧ 松林寺(外郭南濠跡の窪地)

松林寺は出水通から南へ急激に低くなる地点にあり、また境内は本堂部分から南側の墓地にかけて更にもう一段低くなるので、二段堀になっていたと考えられています。堀跡は東隣の昌福寺まで続いており、天保14年(1843)作の「豊公築所聚楽城址形勝」にも「此堀跡今ナラ存」と注記されています。

⑦ 豊臣秀勝邸跡伝承地

平成23年(2011)、標石が建立されました。秀吉の甥で、養子でもあった豊臣秀勝と、その妻である江の邸宅があったと考えられています。



【注意事項】 このマップは、まち歩き資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。
【主催】 京都市上京区役所 【共催】 まいまい京都 <http://www.maimai-kyoto.jp/> 【発行】 京都市上京区役所庶民部総務課 京都市印刷物 第234860号 【お問い合わせ】 京都市上京区役所庶民部総務課 電話:075-441-5029

